

# 日田俳壇考

——九州での蕉風結実を支えた三俳人——

眞杉泰輝

## 序

俳諧の大成者とされる芭蕉は「旅を栖すまとす」るほど、その人生で多くの旅に出た。しかし、その人生で九州の土を踏むことは叶わなかった。そうであるにもかかわらず、元禄後期には蕉門俳諧に親しむ俳人が九州の地に一定数存在していた。享保期に入ると野坡の度重なる九州行脚も功を奏し、九州の地での蕉風俳諧への支持を取り付けている。

また、同じく芭蕉の直弟子であり、美濃派の祖である支考も九州に蕉門俳諧の種を植え、それを安楽坊春波が地道に醸成していった。美濃派の文台授与や秘伝の授与など巧みで戦略的な経営によって九州俳壇の蕉門化を盤石なものにしていったことは先学によって既に述べられている<sup>1)</sup>。

対照的に、芭蕉生前の九州俳壇は古風の貞門・談林の俳風が根強く浸透していた。例えば、貞門俳人の立圃は筑前国秋月藩主黒田長興と風交があったほか、重頼・季吟など一門の重鎮も九州とは関係を持っており、在九州の貞門俳人を多く生み出した。

また、談林派に関しては祖師宗因が九州と関係が深かったこともあるが、延宝期において、その弟子西鶴が九州に門下を置き影響を与えた。具体的には、宗因とも関係を持つ筑前の西海や筑後の西与、豊後日田の西国たちのことである。

このように、芭蕉生前の九州では、貞門や談林といった古風俳諧が広く親しまれており、まだ蕉風俳諧に親しむ俳人は、去来の親戚筋に限定されていた。

これは、九州の地理的限界であるう。しかし、元禄七年（一六九四）の芭蕉没後の直弟子たちの九州曳杖をきっかけに九州俳壇の蕉風化が急速に進んでいく。

豊後日田といえは、芭蕉の没後において肥前の長崎とともに九州における蕉門の一淵藪といえる。

風国撰『初蟬』（元禄九年九月、京都井筒屋庄兵衛刊、鳥落人序自跋）には、この日田の俳人から朱拙・寂芝・釣壺の三名が入選している。また、北枝編『喪の名残』（元禄十年十一月、京都井筒屋庄兵衛・金沢三屋五郎兵衛刊、半紙本二、自序、秋の坊跡）という芭蕉の三回忌の追善集が編まれているが、ここには紫道・

野紅が入集している。さらに、其角編ともいわれている『俳諧錦繡綴』（元禄十年冬、江上隠士山松子序）にはりん女が入集している。

このように、九州ではいち早く蕉風を嗜んでいた長崎の去来の親類たちに勝るとも劣らぬ豊後日田俳壇（以下、日田俳壇）の俳人たちの早期の活躍を見て取ることができる。

では、芭蕉没後二・三年の間に古風俳諧が根付いていた日田において、なぜ蕉風俳諧がここまで急速に流布していったのか。

それには、朱拙・野紅・りん女の三俳人が大きく尽力している。特に、りん女は中央俳人の受け入れ所としての役割と俳人として作品を磨き上げていったという両面で評価のできる人物であったと考えられる。

旧来の研究では、大内初夫氏（以下、大内氏）がその大著『近世九州俳壇史の研究』で、氏の収集した膨大で貴重な資料をもとに隔々まで行き届いた九州俳壇史を明らかにされている。この貴重な先行研究をもとにこの三者がどのように九州俳壇の蕉門化に携わったのかについて考察を深化させたい。

なお、本稿では全体として、読者の読解の便を考慮して表記を改めたり、フリガナや傍線等を施したりした箇所がある。

## 一、元禄七年前後の九州俳壇

貞門に学び、談林に遊び、延宝末期に既存の俳風に疑念を抱き、蕉風という自身の俳風を生み出し、蕉門という一大俳諧集団を成した松尾芭蕉は、元禄七年十月十二日に、大坂南御堂前

央俳壇の流行にも疎く、情報が遅れていたことがうかがえる。

このような状況であったために、惟然をもってしても宿を貸してくれる家などなく、苦戦したようである。まして、行脚中のみすばらしい風体の惟然を歓迎する家などなかった。しかし、日田においてはこのみすばらしい姿の行脚俳人が芭蕉の高弟惟然であることを知った地元俳人が手厚くもてなしたという。

当時、指導者不在であった日田俳人にとって惟然の来訪は新しい指針を得る好機であった。同時に惟然にとつてもスムーズに蕉風伝播を行なうことの出来る絶好の機会であった。すなわち、両者の需要と供給の歯車が見事に一致した瞬間であった。

惟然の行脚による日田俳壇の蕉風化について大内氏は以下のように見解を述べている。

指導者西国を失って間もない日田の俳人たちに「蕉門の寂あり、花ある事を勧め励まし」たので、朱拙・紫道・幽泉などの同地連中は談林と違った閑寂幽玄の蕉風の詩境に魅せられ、急速に蕉風化していった。<sup>23</sup>

引用箇所の前半部分は、単純な事実だとしても、傍線を付した後半部分はいささか希望的観測に拠っているといわざるを得ない。この点に関して、筆者の意見を以下に示していく。

今しがた元禄八年の惟然の日田行脚時にこの地域には俳諧の指導者が不在であったという旨を述べたが、そもそもこの地域の俳人を束ねていたのは、談林派の西国（正保四〜元禄八年）

の花屋仁右衛門貸座敷で没した。生前の芭蕉は行脚に重ね、各地に自身の信奉者を得て、それら芭蕉の教えに賛同し俳諧の腕を磨いた者たちは今日蕉門俳人と呼ばれている。

残念ながら、芭蕉は生前に九州の土を踏むことはなかった。ある資料によれば、芭蕉は九州四国を旅してみたいという願望を持っていたようであるが、達成されることはなかった。<sup>24</sup>

したがって、芭蕉の直弟子去来の長崎在住の親戚筋の者たちを除けば、九州の蕉門人口は極めて少なかった。少なくとも、九州蕉門のような俳諧文化圏を構成できるほどの人数は存在していなかった。

しかし、風国撰『初蟬』（元禄九年九月刊）に日田の俳人の句が入集していることから、この頃には少しづつ九州に去来の親戚筋以外に蕉風を嗜む俳人が登場してきたといえる。この風国撰『初蟬』であるが、序文は鳥落人、すなわち、惟然が担当している。

惟然は芭蕉が没した翌年である元禄八年（一六九五）秋の頃に京を出立し仲秋の名月頃に小倉から九州に入り、長崎街道を通過して卯七亭など去来の縁者の家に滞在し風交を重ねた。そして、鳥原から熊本に入り、大津・阿蘇を経て師走の頃に日田に入りしばらく逗留したという。

この時期の長崎の一部を除く九州各地には芭蕉の「ば」の字も伝わっておらず、土芳『蓑虫庵集』には、惟然が九州を巡っていた時に彼が口にする「芭蕉」というのは女の名前かと聞かれたという逸話が残っている。それほど、九州の片田舎では中であつた。

この西国は、西鶴門で延宝五年（一六七七）に上阪し西鶴から「俳諧之口伝」を受け、宗因ら談林諸家はもちろん其角・桃隣・乙州といった蕉門俳人も関係のあつた人物であり、「地方における談林の最有力者」（『俳文学大辞典』大内氏執筆）と評価されている人物である。

西国が没したのは元禄八年の六月六日で、惟然が日田の地を訪れたのが同年の師走であることから、西国の死後半年ほどの、まだ、師の死の悲しみ冷めやらぬ中の中央俳人の登場であった。西国という中央俳壇とのつながりを失った田舎の俳人たちにとつて、中央俳壇とのつながりを絶やさぬための大きな好機であつた。

また、西国は前記のように、蕉門の俳人も風交をもつたことから、日田の俳人たちは九州のほかの地域の俳人のように「芭蕉は女の名前か」というような愚かな発言をするほど俳壇の動向に暗かったとも考えにくい。

このような状況下に置かれていたことから、日田俳壇の蕉風化は蕉門の詩境に魅了されたわけではないことがわかる。中央俳壇との太いパイプを失った地方の俳壇にとつてみれば、談林だの蕉門だの地方俳人からすれば些末なことで、いちいち気にしていられる状況ではなかった。

それよりも、自分たちの俳諧コミュニティが日本全体の俳諧コミュニティから忘れられる方がゆゆしき問題であつたのではないだろうか。

西国亡き後、日田のような山の中にタイムリングよく惟然が訪れたことから、時流に乗る形で、見かけの上では蕉門に転じたようにふるまっているが、まだこの段階で、どれだけの日田俳人が蕉風をわきまえ、芭蕉の俳諧哲学を正しく理解したのかは甚だ疑問である。

すなわち、日田俳壇の蕉門化は芭蕉の俳諧哲学に感化されて起こった高尚な転向ではなく、地方の小さな俳諧コミュニティが生き残るために必死に考えた結果、泥臭くも俳壇に生き残るための俳風の転向であったと考えるべきである。

この日田俳壇の生き残りをかけた蕉風化成功の功労者は朱拙・野紅・りん女の三俳人である。また、元禄八年師走の惟然行脚以降の九州俳壇の支柱となっていたのは、やはりこの日田俳壇である。

以下に詳しく三者の功績を整理していく。

## 二、朱拙の功績

朱拙（承応二〜享保十八）は、豊後国日田の俳諧師であり、芭蕉死後の俳諧の世界において九州蕉門の指導者といえる存在である。

この人物は、若い時分には儒学の才を使って立身出世を試みるものの夢破れて、その後は専ら俳諧に遊んだようである。

生没年にのみ着目して考えてみると、芭蕉（正保元〜元禄七）や宗因（慶長十〜天和二）との交流があっても不思議ではないが、残念ながら彼らに交流があったという資料はない。

とその矢数俳諧を厳しく攻撃し、さらには

渠は此筋の野人にして論ずるにたらずといえども久しく初心の為に虚名をひきて風俗をみだし剩晩年には好色の書をつくりて活計の謀としたる罪人

と激しく批判を浴びせていることから、談林派に所属しているという意識や談林の方向性を理解し納得していたとは考えにくい。

したがって、朱拙という人物を何派の俳諧師と分類することなどできない。この人物は一途に中央の俳諧文化圏から大きく後れ、取り残されている九州俳壇の現状を憂い、俳諧修業の基本である行脚の形で九州各地をめぐるその土地その土地の俳人たちと直に交わり蕉風を説き、実力のある者を見つけては俳書を刊行させて、九州にも蕉門ありと知らしめていったのである。朱拙にとって蕉風俳諧とは、九州俳壇の俳人をブラッシュアップしていくための道具であったと考える。

では、朱拙の九州各地への度重なる行脚は何を生み出したのか。以下に筑豊地域（本稿では、現在の福岡県直方市、田川市、飯塚市、嘉麻市近辺を指す。）への行脚と熊本地域（現熊本市）への行脚に関する史実を確認していく。

筑豊地域に内包される、遠賀川上流の嘉穂地区は長崎街道・秋月街道の要衝地域であるため、行脚俳人が多くこの地を通過したことは容易に想像できる。元禄十二年（一六九九）前後に

また彼は、はじめは談林を嗜んだものの、後に日田を訪れた惟然の影響を受け蕉風に転じたというのが一般的な説明である。

無論、この先学による説明を否定する気はないが、「談林を嗜んだ」というよりは西国という談林派の俳人と風交があり、仲が良かったが、惟然の筑紫行脚を期に芭蕉の俳諧哲学に触れ元禄八年当時の日田俳壇の置かれていた状況下から、必要に迫られて蕉風に転じたというのが最適解ではないだろうか。そして、彼の大きな功績は蕉風を九州俳人に広めて回り、多くの俳書出版の後見を行ない、地元俳人の俳諧活動を応援し、ひいては俳諧文化圏の活動を活性化したことにある。

そして、九州談林の有力者である西国との関係についてであるが、朱拙と西国を師弟とする説もある。しかし、師弟の関係があったとは考えにくい。この二人は主従とか上下といった関係でつながっていたのではなく、同じ日田の山中にあって互角に俳諧に遊ぶことの出来る教養の持ち主として認めあっていたと考えるのが良いだろう。

それは、西国追善のために朱拙が句を送るなど、その死後においても朱拙が西国を敬慕していた様子をうかがうことができるが、一方で西国の師である西鶴については、

難波の西鶴といふもの、一日二万句のぬしになりたりとて人もゆるさる二万翁とほこりたるはもとより風雅の賢者なれば力なし

朱拙はこの界限に遊んでいる。

それは、筑豊地域在住の俳人である丹山・外川（在直方）や一定・如雪・杉明・直水・友川（在頓野）らが朱拙編『けふの昔』（元禄十二年刊）に入集していることや、紫白編『菊の道』（元禄十三年刊）には、「朱拙に別る」と記された一定・外川の句が残されていることから、惟然の日田逗留からわずか四五年のうちに朱拙は日田以外の俳人を巻き込んで風交を持っていることがうかがえる。

また、この後元禄十四年春にもこの地域に曳杖している。この曳杖時には、この地域の豪家である荒巻家に逗留し、助然と交流を持っている。あくまで、筆者の管見の域を出ないが、この助然はこの時期以降の九州関連俳書や歌仙にその名が散見される人物である。

しかし、元禄十四年以前の九州関連俳書に名前が見えないところから考えるとこの時にはまだ俳諧初心者であったと推察される。つまり、宿を提供する代わりに朱拙に俳諧の手ほどきをしてもらったのであろう。この年、助然は『蝶すがた』（朱拙序、助然自跋）を上梓している。その自跋に「蕉門高達の句ども、函（箱）底にため置けるに、我が方の吟句をとりませ、四ツ時にわかち、つれづれの観となしけるを、此はる四方郎（＝朱拙）にかたりあわせ」とあることから、この年の春の朱拙の助燃亭逗留の際に朱拙と語り合ったことがきっかけでこの一書を成したことがわかる。

この書が、朱拙後見の書であることはポイントおひとつであ

るが、おもしろいのはこの書への入集者である。自跋にもあるように、この書のつくりは芭蕉の高達の句に「我が方の吟句」を織り交ぜたものである。

入手者総数七十二名中四十二名が九州俳人で、四十二名中三十一名が筑豊界隈に住む俳人たちである。

このことから、朱拙曳杖以前に地域的俳諧作者グループが存在していたことがうかがえる。しかし、作品集や俳書を成す機会に恵まれず自身の存在をアピール出来ずにいたところに朱拙が背中を押し、筑豊の地にも俳諧を嗜む文化圏が存在するということ、俳諧作品集を以って示すことに成功したのである。

つぎに、朱拙と肥後熊本地方の俳壇との関わりである。

花植る土一升も城下かな 朱拙

晩柳編『放鳥集』（元禄十四年刊）にあるこの句には「肥州熊本に一夜やどりける」前書きがあることから、朱拙は元禄十四年以前に熊本に曳杖していることがうかがえる。

しかし、今回着目したいのは、元禄十五年十月の行脚である。同十二日、熊本古町助成寺境内に芭蕉追善のための塚、茶の木塚を建立し、住持使帆を中心に追善の俳筵を催した。その座に朱拙は参加している。

「あら墓を有付顔にしぐれ哉」の発句を詠じ、これを立句として百韻が興行され、宗匠として捌きも朱拙が行ったという。

また、元禄十七年にも、この地の古老長水の七回忌追善法要

このように書くと、朱拙の性質を悪く言っているように思えるかもしれないが、この政治的感覚の持ち主を否定的に見てはいけない。

当時の文化的離れ小島であった九州の俳壇を盛り立てることを考えたときに必要かつ重要な戦略であったと考えるべきである。さらに、日田俳壇は中央俳壇とのつながりを絶たれるかどうかの瀬戸際にあったことから、この朱拙の判断と行動は肯定されるべきだ。

朱拙の地道な九州各地への行脚や地元俳人たちの俳書出版の後押し、中央俳人とのいわゆる「外交」によって九州俳壇を盛り立て支えていったことが彼の大きな功績である。

そして、それは彼の若いころからの学問の積み上げによる教養深さと、西国亡き後の九州俳壇を憂えるところからくるものである。

また、惟然や風国との交流の中から、九州俳壇の時流に乗りこなっている実状を感じ取り、すぐにその身体をつかって九州俳人を鼓舞しに向かうあたりは、芭蕉の追隨者といっても過言ではないのではなからうか。

### 三、野紅の功績

野紅（万治三〜元文五年）は、本名を長野直玄（なまはら）といい、豊後国渡里村の庄屋であり、野坡門の俳人である。妻りん女とともに双白堂とも号している。ちなみに、この双白堂はともに白髪になっていくという意味である。

のために杖を曳いている。朱拙と長水に面識があったという事実は確認できていないが、使帆ら熊本俳人にとっては大事な先達であったに違いない。このような、直接的な面識のない相手の法要にも、顔を出し「人息に動く位牌や初ざくら」の句を残していくという朱拙の行動は日田に軸足を置きながらも、九州各地に強固な俳諧文化圏を根付かせるための行為にも見て取ることが出来る。

別の言い方をすれば、朱拙が戦略的に九州各地の俳人たちの支持を得るべく活動していたと考えることができる。

そして、時期が多少前後するが、朱拙の支考との面会についても述べておきたい。支考『梟日記』によれば、元禄十一年六月四日に豊前大橋に逗留していたところ、筑前黒崎から後を追ってきたという朱拙の突然の訪問を受けている。

その際に、朱拙が新刊であった『続猿蓑』を持っていたことも書かれている。支考出立より後の元禄十一年五月刊の『続猿蓑』を地方俳人である朱拙が持っていたことから、支考は朱拙の俳諧への並々ならぬ思い入れを感じたことだろう。九州にありながら、新刊をいち早く手に入れることのできる情報網と伝手が朱拙にあったこともこの出来事で証明できる。

この時朱拙は、中津・日田・玖珠と自身の郷里近辺を案内し二十日ほど支考と一緒に行動をしている。支考の九州行脚を知り、その宿に押しかけたり、当時新刊であった『続猿蓑』をちらつかせたりするあたりは、戦略的に高名な俳人に近づこうという朱拙のしたたかな性質がうかがえる。

りん女は野紅の後妻で十四歳年下である。この年の差や経済的余裕からか、野紅は比較的自由にりん女に俳諧活動を許している。これが、野紅の功績のひとつで、もうひとつは行脚俳人を手厚くもてなし俳交の場を提供したという点にある。

俳諧作家としての力量は、今回横に置くとして、日田俳壇の経営という面において、本州から九州に入っていく、また帰っていく際の通過地点としての日田の立地を十分に理解し、三都をはじめとする本州を伝って九州を訪れる俳人を厚遇し、自宅に逗留させることで、最新の情報から遮断されがちな地方において情報を収集したり、大物宗匠からの指導の機会を得たりしていた。その場の提供者として存在していたのが野紅である。地方に限らず、大御所の俳人と一座したという事実は、俳人たちにとってある種のステータスである。まして、地方にあってはなおのことである。

その結果、野坡や支考といった蕉門の大御所も日田野紅亭に逗留している。

特に、野坡の度重なる野紅亭を訪問は興味深いものである。元禄十五年十一月二十七日にも野坡は野紅亭を訪れている。そのときの状況は、野紅編『小柑子』（元禄十六年刊）に記されている。

廿七日豊後の野紅亭をたづぬ。其間十一里、海道を筋違にわたる。是只風雲のために負笈擔登友を求る類ひにはあらねど、必と約せし事なんありけらし。霜月空の雪はな、宵よりちら

くとおとしかけて、今朝の天また雨なりけり。人馬のかよひに泥ふみこねて、はたがへし・萩の尾峠といふ難所を、こゝにすべり、かしこにまろび、夜に入つて彼家にたぐり着く。

十一里といえは、久留米、日田間の距離に近しい。野坡は野紅亭を訪れる前に、久留米の佐越亭に一月ほど逗留している。この佐越は、野紅の妻であるりん女の弟にあたる人物で久留米の有力な宗匠であった人物である。<sup>6)</sup>

『小柑子』の引用箇所を見るに悪天候の中を「必と約せし事なんありけらし」と前もつて約束があったために野紅亭まで足を延ばしていることがうかがえる。つまり、これ以前に野坡と野紅の間には何らかの風交があったことが推察される。

いずれにせよ、日田にある野紅亭が一つの目的地になつている。その後、宝永三年五月に再度野坡は野紅亭を訪れる。その際の野紅夫妻との交流を記した一文がある。そこには

又今年此宿に旅寝するに、或日、主夫婦差寄て此郷の五年以来の事ども物語せられけるに、予も江戸・難波の事など語りあひ侍る

とある。

前回、野紅亭を訪れてからの近況報告を互いに述べている。特に、野坡は元禄一六年の江戸の大火の体験なども語り聞かせ

単に経済力があればいいという短絡的なものではない。

亭主である野紅自身が俳諧に関する見聞を深めておこなうてはいけない。行脚してきた俳人がどのくらいの腕のものであるのが、彼らが持つてきた情報の真偽や自身が互角に渡り合えるだけの俳諧に関する知識や創作力を身につけておこななければ、日田俳壇という俳諧文化圏の中心としてはいられない。

野紅の作品の多くは、私見ではりん女とふたりで詠んだものである。

しかも、りん女の方が創作に積極的で上手いような気さえする。その一証左として、野紅には句集がないが、りん女には『藤井発句集』『若舛』『歌仙貝発句』という句集が存在する。

無論、未発見の俳書も多くあるので、必ずしも野紅に句集がなかったとは断言しづらいが、彼は創作というよりは、そのコミュニティの文化レベルを下げないように、また、日田という土地が用無しに地にならないように行動したのだろう。

その結果、句作はりん女に任せつつ、自身は庄屋の名に恥じない程度の教養は身につけながらも、もう少し戦略的に自身の持つ肩書や固定資産を含めた財産を上手に利用し、この地域の文化圏を守っていったのである。

また、文化人をもてなすということは、自分たちも勝るとも劣らないくらいにその分野の知識を蓄えておかなければ、大物俳人の定宿とはなり得まい。さらには、野坡が先のような一文を成すほどの頻繁で深い交流は生まれなかつたらう。

このような文化的交流が生まれなければ、日田俳壇の経営と

たのだろう。野紅夫妻と野坡の親しげな交流を見て取ることができる。原文では、この後にりん女の夢解きの話があり、最後に

家久しくもろ白髪に栄行て、猶よろこびのかくなり来り侍らんとぞ、各も申しけるのみ

宝永三年戊五月十七日 東紗帽野坡 敬草

とある。

ひとつ前の引用箇所にある「主夫婦」は「もろ白髪に」とあることから双白堂と名乗った野紅・りん女夫妻のことを指していることは間違いない。また、りん女の夢の中に梅の木が出てくることから、「梅は天神の御慈悲の木なれば(略)たのもしき筋」とりん女を励ましている。そして、この文章は二人の幸せを願って閉じられている。野坡・野紅・りん女の仲のよい様子や野坡のくつろぐ様子が見て取れる。地方行脚中に確実に寢床を提供してくれる知己の存在といのは、体力気力を振り絞る行脚中の旅人にとってこの上なく大切な存在であったことは容易に想像できる。

以上のようなことから、野紅の功績はその庄屋という立場から行脚俳人を厚くもてなし日田に旅人の休息所を作ることによつて、日田の俳諧コミュニティの風通しを良くしたという点にある。行脚俳人と地元俳人の俳交の場を設けるということとしては、

#### 四、りん女の功績

りん女(延宝二年〜宝暦七年)は筑前国秋月の医師遠坂晩柳の娘で、先に述べたように野紅にその後妻として嫁いだ。さらに、野坡門の女流俳人として知られている。

川島つゆ氏によれば、りん女が野紅に嫁いだのはりん女十五、六歳の頃という。そこから野紅との間に五男七女をもうける。また、先妻の子も三人いたため十五人の子供の母親でもあつた。

その人生は、決して平たんなものではなく、三男、三女、四女、四男を幼くして亡くすという不幸に見舞われながら、舅姑は長生きをして、長くりん女を監視した。夫野紅は先述の通り、庄屋としての役目を果たしながら、この時期盛んに九州に杖を曳く本州の俳人たちを自宅でもてなした。とはいえ、実質的に心身を摩耗させて俳人たちをもてなしたのはりん女である。度重なる大きな不幸や恒常的な緊張に耐えながら八十四年の天寿を全うしたりん女の俳諧という芸文空間であつた。特別恵まれた何かを持つていないわけではない普通の女性であつたりん女であるが、その作品は野坡を中心に蕉門の大御所に認められ三つの句集も成している。野坡が認める魅力を持つ女流俳人の日田俳壇で果たした役割について以下に考察する。

元禄十一年六月十四日に支考は友人雲鈴とともに野紅亭を訪

れている。そのときのこと、支考『梟日記』（元禄十二年刊）に

此晝ならん、野紅のぬし、夢もおもひかけぬ事に、をさな子うしなひ申されたし、その妻も風雅のころざしありて世のあはれもしれりける。ふたりの中のかなしさ、露も置所なからん

とある。期せずして、支考は夫婦が幼子を失ったタイミングで野紅亭に到着してしまった。無論、幼子を失った悲痛を思いやることも必要だろうが、ここで支考は傍線部にあるように、りん女も「風雅のころざし」を持っていて「世のあはれもし」つていと述べていることから、このころから俳諧に手を染めていたことがうかがえる。また、この部分のあとには次のような支考・雲鈴・野紅・りん女の発句が併記されている。

世の露にかたぶきやすし百合の花

支考

昼がほもちいさき墓のあたり哉

雲鈴

この客人二人の句は、いずれも幼子を哀悼している。特に、雲鈴句は、幼子がすでに墓に収まっていることを伝えている。娘が亡くなったのが、十一日のことであつたので、葬送が終わつて本間に間もない日の来訪であつた。風雅を解する夫婦と墓に眠るその子供に対して、発句を詠むことによつて、慰め、花を

をしてあげることがうかがえる。その氣遣いに旅の俳人たちも癒され魅了されたのだらう。感謝のベクトルは亭主野紅ではなく、りん女に向いている。

何かし野紅の妻自然と誹風を蕉門にうつせり

かれハ師を見ずして句を知事甚妙なり

あふいて雲鳥花月ならひ俯ては水石一草も心をかよはし  
つくりなせる句は玉を拾ふてならへたるかとし（後略）

この一文は、大内氏が「野坡翁讚野紅妻文」として翻刻し発表されているものであり、野坡の筆によるもの見て間違いないとされている。

本文を見ると、「自然と誹風を蕉門にうつせり」とあることから、西国健在の時から俳諧を嗜んでいたのかもしれない。もしくは、弟佐越も俳諧を嗜んでいることから、野紅と結婚する前から晩柳から多少の手ほどきがあり、俳諧との接点があつたのかもしれない。

いずれにせよ、芭蕉と面識があるわけではないが、よく蕉風を理解していると評価されており、「句は玉を拾ふてならへたるかとし」とりん女は、その創作能力を高く評価されている。

手向けた二句である。

この次に並ぶ野紅・りん女の句には「子をおもふ道にといへる人の言葉も、今の身のうへにおもひつまされて」という前書きが付けられている。

十四日の月に闇ありほと、ぎす

野紅

面かげも籠りて蓮のつぼみかな

倫女

幼子を失った両親の悲しみが表出している。野紅句では「闇あり」と言ってしまうことから深読みかもしれないが、感情を作品に吐き出さずにはいられなかったのだろう。また、りん女の句も特別優れているとは思えないものの、逝ってしまった娘の安らかな眠りを望む母の静かな祈りの句といえるだろう。娘を失った三日後に、客人を迎え、そのもてなしに心を碎かなければいけないりん女を思うとやりきれない。

もちろん俳壇の大御所の来訪は、これだけに留まらず、享保元年には名古屋の露川が門下の燕説とともに野紅亭に滞在している。燕説撰『西国曲』（享保二年刊）によれば、

老衰の頭痛にまくらおあたらしくく、りていたは

られしりん女に申す

伽に鳴く跡や枕の蟋蟀

露川

この露川の前書きを読むと、りん女が客人に細やかな氣遣い

梅清し

なを此すゑの

花と鳥

蕉下 野坡

の句を記している。「蕉下」とあることからりん女を、同じ芭蕉の教え下で句作に励んでいる同志として解る。

そして、「梅清し」という季語を用いていることから元禄十五年十一月二十七日から翌十六年二月中旬まで長く逗留した折に、長期間身辺の世話をしてくれたりん女への感謝の手紙のようなものであることがうかがえる。すなわち、行脚俳人を手厚くもてなしてくれる主婦としてのりん女に対する評価とともに、野坡のように彼女の作品の魅力を認める俳人もいたことが解る。

野坡は、彼女の作品に相当惚れていたようで、『けふの昔』に掲載された「いなづまやいたり来りて夜を明す」のりん女句に對して、「秀逸ま、きこえ待る中にも、たゞあとなくいひながし見るにまばゆくおもふにふかし。更に工みなせるあとも覺えず、此句の右に立てん事を恥るといへど、みだりに余情をのぶ」と評価している。

したがって、元禄十五年の対面以前から、野坡は彼女に一目置いていたことが解る。先の一文から、実際に一座するようになつてからは、尚更、その評価は高まつたといえる。

ではなぜ、野坡がこのようにりん女の作品に感じ入っているのだろうか。それは、彼女の作品の女性性にあるのではないだろうか。

以下にりん女句を並べてみたい。

おのづから恨もえ立つ砧哉

乳香子の耳の早さや雉子の声

出かはりや飽いたながらもおしみ顔

櫛入れるから巻機はたや初さくら

涼しさや髪結ひ直す朝さげん

糸よりてけふもくらしつきりくす

この六句は男性の視点ではなかなか詠むことの難しい情景ではなからうか。

無論、俳諧は虚構世界に遊ぶ文芸であるので、男性が女性視点でものを見て創作することは可能ではあるが、景物を切り取る視座が主婦であり、母の目線である。これは、男には真似することの出来ない業である。

特に、一句目は、主婦の本音のようなものが漏れていて面白い句である。二句目も、乳呑児と密接にかかわる母親の視点が生きている。三から六句目の句もそれぞれ女性の目線からその日常を切り取った句である。

いずれも特別な出来事を詠んだりや奇をてらうような技を仕組んだりした句ではなく、いい意味で平凡である。

での心情を吐露している。

これらに関する実感を伴った作品は、男性俳人では表現できない。男性俳人の見ることの出来ない世界をりん女はその俳諧作品の中に残している。このような、実力のある女流俳人を育成することで近世において俳諧という文芸の表現の守備範囲が広がると確信した野坡は彼女を大事にしたのではないだろうか。

九州の片田舎で、女性が女性として本音をこぼにできるといふのは、稀有なことであつただろう。しかし、女性のこぼす日常の本音は、周囲の俳人たちにとつても刺激的であつたと考えられる。彼女の作品や俳文に現れる女性的な、母親的な、主婦的な感覚といふのは、近世俳壇の視野を広げたといえる。

旧来あまり着目されてこなかった俳人であるが、夫野紅を支えたかいいしい妻というだけではない、俳人りん女の底力は、今後さらに精緻に分析するに値する。

最後に、りん女は生活観漂う句以外にも、

うき人の秋やあわびの片おもひ

のような、かわいらしい句も残している。これはりん女『歌仙貝発句』（正徳六年七月（奥書）、稿本、横一）に収められている。この作品は新歌仙貝と古歌仙貝にわかれており、新にはりん女句を、古には野紅句を三十六句ずつ、貝にちなんだ句をならべている。右の句では、彼女のお茶目な一面も垣間見える。

その中に、人間の生活がリアルに描かれている。しかし、男性作者が多い近世の俳壇の中で、女性の目線で詠まれた作品といふのは、当時の野坡には新鮮だったのだろう。

りん女の女性としての本音は、その俳文にも見て取ることができる。「つばくらの文」と呼ばれる一文がそれである。

百年のよハひも他人にまかすつらく

そのはしめをかそふれハたらちめふと

ころをはなれしより千々のおもひに

袂をひたしおきふしの心ほそさ

たれかハしらん子をはらめるよりよろこへる

までをおもふにつはくらのつはさにかけて

かわゆかりしあハレさも此鳥ならてハと

あともむすハぬ糸の行末人に

見すへきことの葉もなし

くり返す夏の

つはめや

菓こしらへ

りん婦

書かれた時期は不詳であるが、八十四歳まで生きたりん女が「百年の齢」と表現していることから後年の作であろう。百歳が見えてきたときに半生を振り返って、生涯を夫に任せるしかない女性の生涯や妊娠や出産といった女性にしか味わうことのできない人生の節目を燕の造巢の姿と重ねて振り返り、女性とし

## 結

九州俳壇への蕉風伝播を考える上で、日田を避けては通れない。中央俳壇から遠く離れた山奥にありながらも、交通の要所にあつたために、地元俳人の努力と工夫によって中央俳壇で活躍する俳人を引き留め、地元文化圏の醸成に成功している。

蕉風転向に関しても、元禄七年の芭蕉の没後、意識的に芭蕉の高弟たちが九州に杖を曳くのと時期を同じくして、日田在住の談林派俳人でこの地のリーダー格であつた西国が没している。

リーダー不在の日田に良いタイミングで惟然が来訪し、朱拙は中央俳壇とのつながりを絶やさぬために、惟然を厚遇し蕉門に転じた。いうまでもなく、この転向は前向きなものであり、結果として九州に野坡門を形成させ、その後、巧みな経営戦略を持つ支考の美濃派の俳諧文化圏構築にも至っている。

九州が中央俳壇から断絶されずに、俳文学史の一端に残ることができたのも、この転向によるものである。

惟然来訪を起点として、日田俳人、朱拙・野紅・りん女は三者三様の活躍を見せた。すなわち、それぞれの強みをつかって日田俳壇のみならず、元禄後半以降の近世九州俳壇史の土台を作っていったのである。

朱拙は、その政治性を活かし中央俳壇の俳人と交流を保ちつつ、九州各地を行脚して、地元俳人と風交を重ねながら、俳書出版を後見するなど九州俳人たちの俳諧活動の後押しをした。

その結果、九州各地に筑豊や肥後熊本には、それぞれ地元俳

人による俳諧文化圏が形成されていった。このことから、芭蕉から惟然たち直弟子が継承した蕉風俳諧の種を九州日田で朱拙が受け取り、九州各地に蒔いて、筑豊と熊本で実を結ぶことに成功したといえる。

つぎに野紅は、庄屋である身の上から中央俳壇からの来客を積極的に招き入れ、もてなし、それらの俳人と地元俳人の交流の場を提供した。結果として、日田に行けば野紅亭があるという日田の定宿化に成功し、野坡や支考など俳文学史の中心で活躍する俳人たちと日田俳壇の風交の継続につながった。

そしてりん女は、長野家の主婦としてたびたび訪れる行脚俳人を心遣い深くもてなし、俳人たちの謝意を得た。

また、本稿で示したように、主婦としての活躍もさることながら俳諧作家としての評価も高い人物であった。

秀句は強い人間の奥底から湧き出るのが、十五・六で名家に嫁ぎ、長く義父母の監視下で窮屈な生活を送り、四人の子供を幼くして亡くし、長男にも二十一歳で先立たれ、心休まる日もあまりなかったであろうりん女であるが、その女性的作風は当時の男性俳人たちを驚かせ、野坡が認めるほどの「軽み」を表現できる俳人であった。

すでに述べたように、日田に中央俳壇の俳人と地元俳人の交流の場を作った功績は夫野紅のものである。しかし、日田の定宿化を決定づけたのは、りん女の内助の功と俳壇の中心で活躍する俳人たちの興味を引くだけの優れた創作力があつたことといえる。

して地方俳壇が運営されるという旨の解説をされている。

(2) 元禄四年九月二十三日中尾・浜宛芭蕉書簡に「九州・四国の方一見残し置申候間、何とぞ来秋中二も又々江戸を出可申覚悟、不定ながら御待被成可被下候」とある。

(3) 大内初夫『近世九州俳壇史の研究』九州大学出版会 一九八三年

(4) 3による。大内氏調べ。

(5) 元禄十年春、朱拙は上洛し惟然・風国・泥足・壺中らと同座。

(6) 大内初夫「りん女と佐越」『連歌俳諧研究』一九七二年 四二号を参看。

(7) 川島つゆ『女流俳人』明治書院 一九五七年を参看。

(8) 大内初夫「新資料『野坡翁讀野紅妻文』他」付・りん女俳文「つばくらの文」——『国語国文薩摩路』鹿児島大学法文学部国文学研究室 一九九七年 四十一号による。玉城司氏から写真で大内氏のもとに渡り、大内氏が野坡の真跡と判断し翻刻された旨が書かれている。

(9) 朱拙『けふの昔』に初出のりん女「いなづまや」句に対して野坡が軽みの作風の秀吟と絶賛し、この後に出る『放鳥集』には、野坡の賞賛の言葉とともにりん女句が掲載されている。野坡の句も並べて収めてある。

(10) 8の大内氏の資料紹介を参看、引用。

(英進館国語科講師)

このように考えると、九州俳壇の蕉風化のを支えたのは日田俳壇にいた俳人たちであり、日田俳壇を俳諧活動の本質たる作句で支えたのはりん女といえる。

したがって、九州俳壇の蕉風化成功の陰には、りん女という俳人の活躍ありと見届けることができる。

元禄後半からの九州俳壇は古風俳諧から蕉風俳諧に転向し、その後は俳文学史の流れに乗って、中央俳壇の俳人に倣い芭蕉顕彰運動を行っていく。

もし、元禄後半に蕉風転向がなされずに古風のままであったら、また違った俳文学史が生まれていたであろう。

しかし、それは日本文学史の本流からは外れ、今日特筆すべき事象は起こっていなかったかもしれない。逆を言えば、このタイミングで蕉風に転じ、芭蕉の姿を追ったことで九州俳壇史は文学史的深みを得て、このあとの芭蕉を追慕する文学運動のながれに乗ることができたといえる。

本稿では、日田三俳人の活躍を整理することで九州への蕉風俳諧伝播の最初の過程において、日田という土地が果たした役割を再考することができた。

注

(1) 中森康之氏は「美濃派の継承と断絶」『連歌俳諧研究』俳文学会 二〇〇二年 一〇三号のなかで、美濃派の俳壇経営の方法は、文台・三類図・伝書の三点セットを地方有力俳人に授与することによって、いわゆるフランチャイズ制を確立し、その有力俳人を中心と